

---

# Eternal-ARK ~ 世界を紡ぐ想い ~

精霊の庭園

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

E t a r n a l - A R K (世界を紡ぐ想い)

### 【Nコード】

N9008V

### 【作者名】

精霊の庭園

### 【あらすじ】

エターナルアーク。別名、永遠の箱舟。と言われる世界

舞台はその世界でも最も大きいスレイフィア大陸と呼ばれる大陸。

その大陸には八つの国が存在した。

緑豊かで生命にあふれた国、エルティア。

辺り一面が砂漠で過酷な環境のエイルアルド。

自然の防壁に守られた森の国、サルラルト。

世界中からのさまざまな物品が届く、マク・アルガ。

古くからある異世界の扉が存在する国、レスタローブ。

資格を持つものだけが入れるといふ天使が住む国、セラフィム  
異世界にある。魔族や精霊が住む世界樹、ウィルチエルニイ。  
美しい湖と世界樹に近い霊樹に守られたエルフの国、クリスホウリ  
イ。

物語はエルティアにいる少年、ライカを視点に始まる。

## E t a r n a l - A R K 世界を紡ぐ想い (前書き)

どうもはじめまして精霊の庭園です。

今回はプロローグのみを上げておきます。

次の更新は今週中です。

キャラ紹介とかやつちゃうよ!?

・・・すいません。少し壊れ気味です。

では短いですがプロローグをどうぞ。

## E t a r n a l - A R K 世界を紡ぐ想い

### プロローグ

・・・あたり一面何も無い真っ白な世界。

その世界にただ一つ存在するものがある。

一度入ってしまうとまず間違ひなく迷ってしまう。

そう思わせるだけの巨大な神殿。

まるで神々の神話に出て来るような神殿だ。

その神殿の奥には8本の大剣が保管されている。

そしてその剣の前にたたずむ一人の少女が立っている。

まず目に入るのは少女の長い髪だ美しいほどの緑。

例えるならエメラルドのような透明感をもった髪の毛だ。

白を基調とした、法衣に身を包み耳の部分からはどこまでも白く

神秘的な羽が生えている。それだけで少女が普通の人ではないことがわかる。

「・・・私はただ見守るだけ。世界の傍観者。」

もう何度目になるのかわからない。少女は自分の使命をつぶやく。

世界の傍観者。それはこの世界の成り行きをただ見つめるだけの役目。

世界。いつからだろう名もなき世界には一つの名が付いていた

エターナルアーク。永遠の箱舟と名づけられた世界。

少女はその世界の中でも最も大きな八つの国を見守り守護する存在だった。

八つの国が存在するのはスレイフィアと呼ばれる大陸。

緑豊かで生命にあふれた国、エルティア。

辺り一面が砂漠で過酷な環境のエイルアルド。

自然の防壁に守られた森の国、サルラルト。

世界中からのさまざまな物品が届くスレイフィア最大の国、マク・アルガ。

古くからある異世界の扉が存在する国、レスタローブ。

資格を持つものだけが入れるといふ天使が住む国、セラフィム

異世界にある。魔族や精霊が住む世界樹、ウィルチエルニイ。

美しい湖と世界樹に近い霊樹に守られたエルフの国、クリスホウリ

イ。

少女は八つの国をただひたすら長い長い時間見守ってきたのだ。

「全てはあの少年が握っているんですね。」

少女はそう言うと一つの国を見る。

エルティア。その国にいる一人の少年を見ていた。

「ラキフェス・・・貴方の存在に全てを賭けます。」

## 〜キャラ紹介〜（前書き）

どもども。精霊の庭園です（＾Ｏ＾）ノ

今回はキャラ紹介です。と言っても一部ですが・・・

実はこの物語、メインのキャラだけで21人位いたりいなかったり・

・  
というわけでござー！

## 〜キャラ紹介〜

ライカ・セリユンラート

8月21日生まれ

種族：半魔族

ジョブクラス：双銃剣士

18歳（見た目だけで実際は118歳）

身長177cm

体重60kg

生まれは：ウィルチエルニイ

趣味：基本的に多趣味。放浪癖がある

好き：仲間、ギルド

嫌い：特にない

夢：世界中を旅すること

性格：楽道家。

座右の銘：大切なのはどうしたいかじゃない。どうするかなんだ。

本作の主人公。人間と魔族のハイブリットでその身に場違いなほどの魔力を宿す。

しかし本人はまだ使いこなせてない模様。母親は魔族の中でも上位の魔族らしく

ライカもその力の片鱗である蒼き雷と水晶眼クリスタル・アイという特殊能力を使う。

大空を自由に飛び回る蒼天のように蒼く澄んだ翼を持つことから蒼天のライカと呼ばれている。

所属しているギルドは、エルティアギルド、月桂樹の葉ローレル・リーフでまさかのギルドマスターでもある。しかし基本的にはマスターとしての仕事はしていない模様。

よく依頼を受けてあちこち飛び回っている姿が目撃されている。

イリス・フォルライト

12月24日生まれ

種族：エルフ族

ジョブクラス：調律者

17,18歳（見た目だけで実際は218歳）

身長157cm

体重46kg

生まれは：クリスホウリイ

趣味：家事全般。特に料理が得意

好き：この世界

嫌い：差別

夢：自由に世界を見てみたい

性格：純真無垢だが知りたがり。知識に対する欲求はかなり高い。

座右の銘：目に見えるものだけが全てじゃない。目を閉じればもっと感じて見えてくるものがある。

本作のヒロイン。エルフ族の少女で実年齢は200を超えているが

そんな事は微塵も感じさせないほどの笑顔をもっている。

200年以上エルフの国クリスホウリイから出たことがなく、  
外の世界に関する知識はほぼ0といってもいい。

魔力は若干高めだが何より優れているのは、

7系統ある魔法のうち6系統の魔法を使いこなすことである。

中でも光の魔法が特に得意で回復や解呪といった能力を使う。

所属ギルドはなく、ギルドに入る目的でエルティアまでやって来た  
所、

モンスターに襲われライカと出会う。

普段国から出ることのないエルフがなぜエルティアに来たかは不明。

そのため現在の所彼女の目的は謎に包まれたままである。

## 緑の髪の聖女

この世界を見守っているという謎の存在。

なぜこの世界を見守っているかなどは詳細は不明。

ラキフェスと呼ばれる人物が何か関係しているようだ。



## 〜一章 始まりの序曲〜（前書き）

どもども、精霊の庭園です。（＾Ｏ＾）／

今回はようやく1話になります！！

少し短いかもと思いますが今はここまでという事でご了承下さい。  
話に触れると、今回はライカとイリスの出会いのお話です。

まだまだ話が見えてこないエターナルアークですがこれから面白く  
なっていくと思います（多分）

では本編をどうぞ。

## 一章 始まりの序曲

走る。ただひたすらに走る。後ろから迫りくる追手から逃げる為にただひたすらに森を走っていた。

メキメキ、バキッ

木々をなぎ倒す音がだんだん近くなってきていた。

巨大な獣。大きさは8メートルにもなる巨体の獣は迷うことなく獲物を追いかけていた。

「はあ、はあ、まずいなあ・・・逃げられないよ。」

逃げているのは女のようにだ。獣にとって女の肉は柔らかく極上の獲物だ。

絶対に逃がさないとばかりに執拗に追いかけてくる。

走り続けて疲れてきたのか足が重くなる。体が限界だと訴えているようだ。

しかし獣は疲れを感じることもなく木々をなぎ倒し迫ってきていた。

それでも走る休むのは逃げ切った後で十分にできる。そう考え再び走りだす

何処をどう逃げ回ったかわからないが不意に足を止めることになった。

目の前に広がる絶望的な光景に絶句した。

後ろから迫ってきている獣と同じ獣が目の前にもう一体いるのだ。

挟み撃ちにされたことに今気づく。それと同時にもう逃げることは不可能だと悟った。

「グルルルルル」

挟み撃ちにし獲物は勝ち誇ったように唸り声を上げる。

獲物を捕えるのが待ちきれないのか待ちかまえていた獣が女に襲いかかる。

8メートルの巨体が口を大きく開き跳びかかる。

「つく。」

女はとつさに横に飛びその攻撃をかわす。しかし獣の牙が着ていたロープに引っ掛かり

ロープが破れてしまう。バランスを崩した女は地面を転がりどうにか起き上がる。

頭まで被っていたロープは破れ素顔が覗いている。

体制を立て直す間もなく次の攻撃が来る。

今度は避けきれない。そう思い女は死を覚悟し目を閉じる。

獣の牙が女の柔肌に突き刺さり女は獣たちの餌になるその瞬間を待っていた。

.....

おかしいその瞬間がいつまでたつても来ない。あるいは痛みを感じることなく

死んでしまったのだろうか？女はゆっくりと目をあける。

そこには信じられない光景が広がっていた。

獣の前に女を庇うように立っている一人の少年が立っていた。

「もう大丈夫だよ？すぐに終わるから動かないで。」

少年は獣を見たまま女に言葉をかけると両手に持っていた武器をかまえた。

双銃剣。少年が構えた武器はそう呼ばれるものだった。銃に長さ70センチほどの剣が付いている武器だ。

「グルアアアアアアアアア」

獲物の前に突然現れた少年に獣は容赦なく襲いかかる。

少年はその攻撃を避けることなく双銃を向けトリガーを引いた。

ドン、ドン

二発の銃弾は獣の頭を打ちぬき声を上げることなく絶命した。

「グルッ!?」

仲間がやられたことについていけないのだろう。もう一体の獣はその場にとどまっている。

少年はその隙を逃さず、一瞬で獣との間合いを詰め右手の銃剣で獣の首をまっぴたつに切り裂いた。

先ほどと同じようにその獣も声を上げることなく息絶えた。残ったのは少年と地面に座り込んでいる女だけだった。

少年は少しの間辺りを警戒していたが、安全だと判断し警戒をといた。

それと同時に両手に持っていた双銃も淡い光を放ちながら、ゆっくりと消えていく。

「ふう。どこか怪我とかしてないかな？」

少年はゆっくりと女のほうに振りかえる。女は初めて自分を助けてくれた少年をみた。

白いコートに褐色の肌、太ももや両腕には装飾が施された軽装の鎧をまとっていいいる。

少し逆立ったような銀髪。そして何より目立つのはその瞳だった。オッドアイ。右目は空のように蒼い瞳。左目はそれとは対照的に紅く、真つ赤なルビーを想像させる。

「あつ・・・はい大丈夫です。」

啞然としていた女は、我に返ると自分を助けてくれたことに感謝した。

普通ならあの場で死んでいるのだ。まさか助かるなどとは思っていなかった。

「よかった。このエルティアにこんな獣がいる方が珍しいからね。あれ？・・・君は」

少年は女の姿を見ると少し驚いたような顔をしていた。

ローブが破れているせいで素顔が見えているのだが、その容姿は女と呼ぶよりは少女と呼ぶに相応しかった。

特徴的なのは耳。人間より長く尖っているそれは滅多に見ることのないエルフと呼ばれる種族だった。

更に目を引くのは、蒼く澄んだ湖を想像させるサファイアの髪の毛。人懐っこそうな顔立ちに琥珀色に瞳。正に神話に出てくるような少女だった。

「あの・・・私の顔に何か付いてますか？」

言葉を失っている少年に少女が怪訝そうに答える。

もちろん顔にはなにも付いていない。あるのは完成された美だけだ。

「いや、なんでもないよ？それよりどうしてエルフの君がこんな場所<sup>ところ</sup>にいたのかな」

見とれていたなどと初対面の少女に言える訳もなく少し無理やりに話題を変える。

「その、この辺りにギルドがあると聞いてやってきたんですけど。ご存知ですか？」

少女が答えを返すと同時に少年は納得した。

ギルド。それは各国にあり、さまざまな依頼を受け仕事をこなす職である。

何人もの人々が集まり形成される組織だけあってその規模は大きく

ギルドには必ず運営と依頼の内容を管理するギルドマスターがいる。

このエルティアにも、もちろんギルドは存在する。

エルティアのギルドは（月桂樹の葉）と呼ばれるギルドだ。

少年はこのエルフの少女が言おうとしていることが分かっていた。

ギルドの名が出てきた時点で殆どの人は分かるのだが

実は少年も月桂樹の葉のギルドメンバーなのだ。新しい仲間が増えるかも知れない。

そう思い少年は口を開く。

「ギルドの場所は知っているよ？ここから3時間位歩いたところかな。」

望んだ答えが返って来たことに少女は目を輝かせる。ようやく見つけたといわんばかりの顔だ。

「本当ですか！？あの良かったら案内していただけませんか？道が分からないので。」

もちろん少年は断る気はない元々こんな獣がいる森に少女を放置する気はなかった。

少女がどう言おうとも一度ギルドに連れて行くつもりだったのだ。

「ああ。かまわないよ？俺もギルドに帰るところだから。」

「それにこんな所に女の子を放置するなんてできないからね？」

それを聞いて安心したのか少女は安堵の笑みを浮かべて頭を下げてきた。

「ありがとうございます。えっと名前伺ってもいいですか？」

確かにまだ自己紹介はしていない。これから少しの間一緒に行動す

るのだから名前がないと色々と不便だ。

「ライカ。ライカ・セリユンラートだ。」

ライカと名乗った少年は少女に手をさしだした。少女はその手をつかみ同じように自己紹介する。

「私は、イリス。イリス・フォルライトっていいいます。」

互いに名乗りあい二人は握手をした。

かくしてライカとイリスはエルティアギルド、月桂樹の葉を目指して歩き出した。

エルティアのギルドは森の奥にある。更に侵入者防止の為に結界が張っており普通の人はずり着くことができない。

結界を超える力を持つ者か、結界の仕掛けを知り回避できるものしかギルドには行けないのだ。

イリスと名乗った少女がたどりつけなかったのもこの理由からに他ならない。

この森。ウルスの森と呼ばれる森で迷い最後には森の入口に戻ってしまう。これが結界の仕組みだ。

ライカを先頭にすぐ後ろをイリスが付いてきている。ライカはペースを少しだけ落とし、付いて来やすいようにしている。

ただ互いに会話はなく、森の静けさと風のささやきだけが聞こえて

くる。そのせいか二人の間には微妙な空気が流れている。

「・・・あの、ライカさん？」

この空気にたえられなくなったのはどうやらイリスの方だった。ライカの背中に向かって声をかける。

正直ライカ自身も、あまり黙っているの得意ではない。会話をしたかったのだがどうにも話しかけるタイミングが分からなかった。

なんとか会話の糸口を見つけようと思っていたのだが、相手の方から助け舟が出たので迷うことなく便乗させてもらう。

「ん？どうかしたのかい。もしかして少し疲れたかな？そろそろ休憩しようと思っていたけど。」

我ながら、らしくないと思ってしまう。ライカは本来人見知りなどしないと思っていた。

ただなぜかこのイリスという少女を見ると話しにくい。緊張しているのだろうか？などと自問自答を繰り返すが答えはでない。

「いえ、少し疲れてきているのは確かですけど・・・ただ気になることがあって。」

「気になること？」

「はい。このエルティアの森ってなんだか不思議だなんて。」

そう言ってイリスは辺りを見回す。同じようにライカも森を見回す。

ああそういうことか。ライカはイリスの言っている不思議というものに心当たりがあった。

このウルスの森は、他の森と圧倒的に違うのだ。その違いとは色だった。

ウルスの木々が生え森となっているウルスの森はとにかく桃色なのだ。まるで桜が満開になっているかのような光景が辺りに広がっている。

それはウルスの葉が桃色であるからなのだが、初めて来る人は大抵が驚く。イリスにその説明をすると随分と熱心に聞いてくれた。

「ウルスの木は、このエルティアにしか生えない木だからね。森の中央に行くとウルスの大樹もあるよ。」

ウルスの大樹。それは樹齢600年と言われている。エルティア最大の大樹である。

ウルスの木は、樹齢1000年を越えると実を付けるようになりその実は栄養価が高く、エルティア間では随分重宝される食材だ。

中でも大樹の付ける実は何よりも甘く、そして瑞々しい。収穫の時期は年に2回あり、収穫祭まで開かれている。

「やっぱり他の国に来ると色々勉強になるよ。その収穫祭は何時やっているの?」

収穫祭と聞いてやはり興味があるのだろう。その顔は年相応の可愛

いさがでている。

「すまない。収穫祭は2ヶ月ほど前に行われたから次は4ヶ月後になるんだ。」

楽しみにさせた手前少し罪悪感があった。だがイリスは特に気にする様でもなく次の収穫祭が楽しみだと微笑んでいた。

1時間半くらい歩いただろうか？太陽の位置が高くなっている。そろそろ昼のようだちょうどいいことにウルスの大樹が近い。

「イリスちゃん、もう少ししたらウルスの大樹があるからそこで一休みしよう？」

ライカに呼ばれた直後イリスは少し不機嫌になった。なんとなくその感じを感じ取ったライカは訳がわからず頭に？？が浮かぶだけだった。

いったい何を怒っているのだろうか？イリスの不機嫌は、大樹の下に来ても絶賛継続中だった。

元々出会って間がない関係なのでなにか気に障るような事をしたのかも知れない。

しかしこのまま黙っているのも辛いだけなのであえて話しかけてみる。もし本当に俺がなにかやってしまったのなら謝れば済む話だ。

「えっと・・・イリスちゃん？なにか怒っているみたいだけど。」

ライカに話しかけられてイリスは更にムツとした顔になる。

こういう顔もなんだか可愛いなんて和んでしまいそうなのだがこ  
こは先に理由の説明が必要だ

更に追求しようとするが、その前にイリスの方から口を開いてくれ  
た。

「ライカさん。私って何歳に見えるかな？」

急に訪ねられたことにライカの思考は訳がわからなくなってくる。

イリスの歳？それは聞いてみないとわからないが見た目は17〜1  
8位に見える。だから平然と

「イリスちゃんの歳？そうだね17、18歳くらいかな？」

と答えてしまう。それを聞いたイリスは少しだけため息をつくど、  
さっきまでの不機嫌が嘘のように無くなり

微笑をしながら口をひらく。

「ライカさんはひとつ大きな勘違いしてるよ？私エルフだよ、本当  
の歳は218歳だったりします。」

衝撃の告白だった。見た目の歳が自分とほとんど変わらない少女の  
口から出た言葉の一瞬言葉を失う。

いやそんなに珍しいことではない。事実ライカ自身もすでに100  
歳を越えているのだから。

「だからね・・・その今更。ちゃんとかって呼ばれると抵抗があつて怒ってるわけじゃないんだよ?」

なるほど。確かに年上の方をちゃんと呼ぶのは少々失礼だ。そう思  
い、訂正しようと呼びなおす。

「それなら、イリスさんでいいかな?」

しかしそれもすぐに却下されてしまう。

「むう。なんだかそれだと他人行儀だよ。だからイリスでいいよ?  
ライカさん。」

つて初対面の相手にいきなり呼び捨てはちよつと思つてみたがあ  
まり気にしてもしょうがないので仕方なくイリスと呼ぶことにした。

「分かったよ。イリスでいいんだね?」

改めて呼ばれたイリスは満面の笑顔を浮かべ頷いた。見た目は完成  
された美だと言つてもやはり笑うと

17、18の年相応の笑顔になる。この時ライカは自分の胸の内に  
小さな思いを描いた。

出会つて数時間も経っていない少女に思うことは少し失礼かもしれ  
ないが口に出さなければいいだけだからと思う。

それは・・・(この子は少し苦手かも知れない)ということだった。

大樹の下で休憩をしていると気持ちいい風が吹いてくる。

元々エルティアは気候が安定しているため四季でいうところの春に近い。心地よい風と日差しは思わず眠気を誘ってくる。

時間的に昼なのでライカは小腹が空いていた。大樹を見上げるとウルスの実がいくつか実っている。

「イリス、お腹空いてないかな？」

ライカが尋ねるとイリスは自分のお腹を見てから、少し空いたかもと答えた。

答えを聞いたライカは立ち上がり大樹を見回した。一番美味しそうな実を探しているのだ。

「よし、あれにしよう。」

そう呟いたライカは右手を実に向けて構えると右手から小さな雷が走った。

その雷は実に当たり特に傷つくこともなくライカの元に落ちてくる。同じ方法で2つの実を取ると一つをイリスに差し出した。

「イリス、これ食べてみて。口に合うかどうかわからないけど？」

イリスは実を受け取るとしげしげと眺めていた。元々ウルスの実は見ただ目が微妙なのだ。

形はひょうたんのようで、色は熟したものでウルスの葉と同じピンクいろなのだ。

しばらく見ていたイリスだが意を決したように実をかじった。瞬間イリスの顔が驚きに包まれる。

見た目はアレなウルスの実だが栄養価が高く、味もいい。その為、エルティアの国には欠かせない食材である。

イリスの顔が変わるのも当たり前というべきだろう。

「これ、すごく美味しい！凄く甘いのに瑞々しくて、それに食感がリンゴみたい。」

初めて食べたウルスの実はどうやらイリスには好評だったようだ。

イリスはそのまま、ぱくぱくと夢中で実を食べている。その姿を見たライカも胸をなでおろし手元に残った実にかじりついた。

昼食にウルスの実で軽く空腹を満たし小休止すること30分。その間お互い黙りこんだままだった。

やはり出会ったばかりなのだ。共通の会話など無いに等しい少し前の気まずい状態に逆戻りしてしまった。

だが黙っていても仕方がない。休憩も十分だしそろそろ出発にしようとしてライカは立ち上がった。

「そろそろ、行こうかイリス？ここからなら後1時間くらいで着くからね。」

声をかけられたイリスはすぐには反応しなかった。むしろ聞こえて

いないかのように無反応なのだ。

「?。」

不審に思ったライカはイリスに近づいていく。もしかしたらさっきの獣に毒でもくらわされたかもしれない

そんな事が頭をよぎる。しかしライカの懸念はただの杞憂だった。

(……………おいおい寝てるのかよ。)

そうイリスは長旅の疲れか、または極度の緊張からきた疲労かは分からないがすっかり眠っていた。

大樹を背もたれにし、規則的な寝息をたてている。どうりで会話がないわけだ。

ライカは一人納得し近くに座り込んだ。起こすのも可哀想なので起きるまで待つことにしたのだ。

ほどなくして二人は再び森を歩いていった。起きるまで待つつもりだったライカだがその後、5分も経たずイリスは目を覚ましたのだ。

それからすぐに出発し、もう少しでギルドの結界の近くまで来ていた。

「もう少し進んだら結界があるからそこを越えればギルドはすぐだよ?。」

かけられた言葉にイリスは嬉しそうに頷いた。目的の場所にもうす

ぐ到着することで胸が高鳴っているのだろう。

若干イリスの歩くペースが上がったようだった。

「もうすぐエルティアのギルドなんですね。どんなところなのか今から楽しみ。」

だいぶ緊張も解れてきたようでイリスはさっきからライカとの会話を楽しんでいた。

「意外と普通の場所だよ？設備はしっかりしているから生活物資さえあれば不自由はしないかな。」

特に意味のない会話だがライカも同じように会話を楽しんでいた。しかしそれこそがライカの最大の油断だったのかもしれない。

ライカの右側から突然信じられないような衝撃がその身を襲った。

「つつ！？」

何かになぎ払われライカは4〜5メートルほど吹き飛ばされる。木に叩きつけられ口の中に鉄の味がした。

「ライカさん！？」

突然の事態に状況が飲み込めていないイリスの声が聞こえる。ライカは衝撃が襲ってきた方を見た。

それはさっきの獣などが可愛く見えてくるようなモンスターだった。

体長は8メートル近くあり、肌は黒く水晶のように透き通った2本の長い角と、ライオンのような鬣が特徴的なモンスター。

「なんでこんな所にクリスタル・レオがいるんだ？普通こいつは山奥に住んでいるはずなのに。」

ライカは相手を確認すると、すぐに駆け出しイリスの前に出た。

「イリス、危険だから下がっててもらえるかな？」

状況を理解したイリスは頷きそこからさらに3歩下がった。それと同時にクリスタル・レオがライカに襲いかかる。

右脚を大きく振り上げ爪で切り裂こうという一撃だ。

「ガルアアアア！」

ライカはそれを確認すると前に踏み込みクリスタル・レオの顔を蹴り飛ばした。目測を誤った爪の一撃が地面を抉る。

普通の人間が一撃でも食らえばまず重症は免れないだろう。しかしライカにはそんな攻撃は当たらなかつた。

後ろで見ているイリスはライカの異変に気づいていた。あの獣の攻撃を受けた瞬間ライカの魔力の質が変わったのだ。

それは些細な事だったがイリスは見逃さなかつた。

「真つ赤な真紅の両目？」

イリスは今、獣と攻防を繰り返しているライカの目の色が変わっていることに気がついた。

元々は蒼い瞳と、紅い瞳のオッドアイだったが今は両目とも紅く染まっている。

その時からライカは獣の攻撃を先読みしているかのようにかわし打撃を入れているのだ。

しかしそれも決定打にはならない。獣の肌は固く、そう簡単にはダメージを与えられないのだ。

ライカは獣「クリスタル・レオから一度距離を取り、両手を交差させるように構えた。

それと同時に詠唱を開始する。

「吾、名はライカ。吾身を守り吾剣となりし者よ。その呼び声に答えその力を示せ！召喚、双銃剣・クロニクル・アーク」

まばゆい光とともにライカの両手には初めに持っていた双銃剣が握られていた。グリップを何度か握りなおし感触を確かめると

ライカは再び獣にむけて走り出した。銃で牽制しながら近づき、双剣を振るう。次の瞬間獣の右脚がぱっくりと切れた。

「ゲルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！？」

痛みに耐えながら獣は再び攻撃を仕掛けてきた。今度は左脚の攻撃だったしかしその攻撃もライカには無駄だった。

体を回転させ左脚の攻撃を避けるとそのまま双剣を振り獣の左脚を切断した。鼓膜が破れるかのような苦しみの咆哮が獣からもれる。

「ギャ、ギャルルアアアア！」

獣に残された武器はもはや牙と、2本の角だけだった。だがすでに獣は戦意を失い頭をさげた。それはその獣にとって死を覚悟したという意味だった。

「モンスターランクCのクリスタル・レオがなぜエルティアにいるのか知らないけど野放しにはできない。悪いけど覚悟してもらおうよ？」

すでに抵抗する意思がない獣に対しライカは銃を向け額を打ち抜いた。その瞬間獣は一言も発する事もなく絶命した。

後ろの方で黙って見ていたイリスが恐る恐る近づいてくる。

「終わったの？」

イリスの質問にライカは短く、ああ。と答えた。それと同時にライカの双銃剣は再び虚空に消えたいく。

イリスはすでに動かなくなった獣を可哀想な目で見つめその後何かを決心したように獣の前に立った。

「イリス、何をする気だい？」

ライカの言葉に反応せずイリスは魔力を解放した。それは色で表わ

すなら白く、そしてとても温かい魔力だった。

その雰囲気はまるで聖女のようにライカはそこから何も言えずただ黙って見守っていた。

魔力に包まれ獣から黒い何かが抜けていく。それはイリスの周りを2、3周するとやがて光となって消えていった。

「この子の魂を浄化してあげたの。闇に染まった黒い魂を。」

イリスの言葉にライカは驚きの色を隠せなかった。魂の浄化は確かにエルフが得意とする術の一つだが獣の魂まで浄化するのは見たことがなかった。

それは本来、人間などに使われる術であり獣に使う術ではないのだ。しかし闇に染まった魂を浄化したとなれば話は別だ。

人間やエルフは闇に染まりやすく魔道に落ちるのも珍しくない。しかし獣が闇に染まるなどと言うことは初耳だ。

もしかしたら近年生息地域が違うモンスターが凶暴化し暴れまわる事件となにか関係があるかもしれない。

ライカは一人思考していた。まだ決定づけるには早く明確な情報がないからだ。

「さあ、行こう？ライカさん。もうすぐギルドだよね。」

イリスの声に我に返ったライカは曖昧に返事をしそしてギルドに向けて歩を進めた。

歩く道中、イリスは機嫌が良かったしさっきのような聖女の雰囲気は消えていた。深く考えても仕方ない。

とりあえずこのイリスと言う少女からは悪意や敵意といったものを感じない。今はそれだけで十分だと自分に言い聞かせる。

連れてきてしまったものは仕方ない。元々悪い人ではないと確信があつたからここまで連れてきたのだから。

森を歩き結界を通りついにたどり着いた。

エルティアギルド、月桂樹の葉へ。周りを楽しそうに見つめるイリスにライカはわずかに微笑しながら言葉をかけた。

「ようこそ。エルティアギルド、月桂樹の葉へ。」

新たな仲間にかける最初の一言。それはイリスにも分かったようで今までで一番の満面の笑みで

「これからよろしくね。ライカさん！」

と答えてきた。ゆっくりと歩き、ギルドの入口に向かっていくイリス。今は新しい仲間の誕生を祝うだけでいい。

ライカはそう考えイリスの背中を見つめていた。この時すでに大きな問題に巻き込まれているとも知らずに。



く一章 始まりの序曲く（後書き）

一章を読んでいただきありがとうございます。  
感想等していただけると幸いです。

次回のお話はギルドの中のお話になります。

そこには新しいキャラ達が沢山いたりいなかったり・・・

ま、まあ今週中に新キャラ投稿を上げたいと思うので楽しみに待つ  
ていただけると  
いいかと思えます。

く新キャラ紹介く（前書き）

ども精霊の庭園です。（くーく）

最近の仕事が忙しく・・・なかなか思うようにお話が書けないというのが

現状です。

しかし諦めませんよ！まだ始めたばかりだもん！！

というわけで今回は新しいキャラ達三名の紹介です。

全員月桂樹の葉のメンバーなので次の2話には確実に登場します。

ライカ達といったどんな絡みをするのかご期待ください。

## く新キャラ紹介く

シン

9月2日生まれ( )

種族：人間

ジョブクラス：剣士

17歳

身長172cm

体重58kg

生まれは：レストアローブ

趣味：剣術の鍛錬。

好き：剣、ギルド

嫌い：権力を悪い使い方する奴

夢：世界最強の剣士

性格：生真面目

座右の銘：一切万事我より出でて我に帰る。

エルティアギルド、月桂樹の葉に所属する剣士。

剣の腕は今はまだ未熟だがその上達ぶりは他のメンバーより頭一個分飛びぬけている。

何事にも真面目に取り組む人間だが人当たりは優しくまさに人に優しく、自分に厳しくのスタイルを貫いている。

最近はいかに剣術の稽古をつけてもらう事が多く、よく訓練場で二人が鍛錬している姿が見られる。

リーシャ・セルティカ

7月4日生まれ（ ）

種族：人間

ジョブクラス：魔法弓士

16歳

身長155cm

体重42kg

生まれは：マク・アルガ

趣味：多趣味。何でもやってみてすぐに飽きる

好き：甘いもの。

嫌い：勉強、とにかく学ぶというものが嫌い

夢：お嫁さん（笑）

性格：天真爛漫

座右の銘：そんなもの考えたことない。

月桂樹の葉のおバカ担当？基本的に天真爛漫な性格からか、常に明るくそしてよく暴走する。

なんでもやってみる姿勢は見せるがすぐに飽き止めてしまう。

その中でも弓だけは止めることなくやり続け、本気になれば1K離れた所から正確に的を貫くことができる。

しかし本人があまりやる気を見せない為、それを見たという人は少ない。

依頼は常に二人以上で受けている為失敗率は低いが一人で依頼を受けるとまず失敗して帰ってくる。

そのため普段はギルドのカフェテリアで看板娘をやっている。

テンマ・ルウ・イグニール

10月8日生まれ（ ）

種族：龍族

ジョブクラス：龍滅士

22歳（実年齢は422歳）

身長180cm

体重68kg

生まれは：ウィルチエルニイ

趣味：読書

好き：セリユンライト家、魔道関係の書物

嫌い：闇に堕ちた龍族

夢：龍族の一族の繁栄。

性格：紳士的で丁寧な口調が特徴的。

座右の銘：自分の罪は、自分で刈り取る。

月桂樹の葉のメンバーで、代々セリユンラートの一族に使えてきた龍族の末裔。

現在龍族の数は少なく200人前後しかいない為、テンマは一族の繁栄と復興を常に夢見ている。

性格は紳士的で柔らかな物言いが特徴。しかし一度戦闘になると、その性格は一変し好戦的になる。

龍族としての力は強く、龍人形態では紅く染まった龍燐から赤龍の神童と呼ばれている。

現在はそのセリユンラート家の一人であるライカに使えているがそれとは別に、闇に染まった龍を狩る仕事もしている。

く新キャラ紹介く（後書き）

さて次の更新予定はちょっと未定ですが、なるべく早めに上げたい  
と思います。

早ければ今週末か来週くらいですかね？

なんかグダグダですいません > m ( | ) m <  
ではこれくらいで失礼しますく

## 第二章 月桂樹と蒼翼（前書き）

お久しぶりです。精霊の庭園です>m)——(m<  
最近では忙しくなかなかなかと思うように更新できないのが現状です。

今回は第2話という事でまだ途中ですが一通り書いたので上げておきます。

次の更新で2話は終わりになると思うので今回は半分だけになると思います。

それでは少し短めですがエターナルアークをお楽しみください

## 第二章 月桂樹と蒼翼

朝の日差しと共に小鳥たちのさえずりが聞こえる。夢見心地の頭が少しずつ覚醒していくのが分かる。

意識はすでに起きているのだろうと自然に目を開く。そこは見慣れない部屋だった。

アンティーク風の作りに広い部屋。床に敷かれている絨毯や少し古い感じのするテーブルやソファがある。

目が覚めたばかりのイリスはゆっくりと周りを見渡した。近くのソファに昨日出会った少年、ライカが眠っている。

昨日の夕方の事を思い出す。エルティアに来てから魔物に襲われ、ライカに助けられた事。

その後行動を共にしこのエルティアギルド、月桂樹の葉にたどり着いた事。

そう、ここは月桂樹の葉の中にあるライカの部屋だった。

昨日急にギルドに来たイリスには部屋などは用意されておらず悩んだ末、最終的にライカの部屋に泊まる事になった。

初めライカは、イリスとは別の場所で寝ると言っていた。

しかし部屋がないと聞いていたイリスが何処で寝るのかと聞いたところ

「適当に外の木の上でも寝てくるよ。」

と答えられた。その瞬間さすがのイリスも一瞬固まってしまった。命の恩人である人物にそんな待遇が許されるはずもない。

イリスはライカが外で寝るなら自分が外で寝ると言い出し、客人を外で寝かす訳にはいかないと言うライカと口論になった。

結果的にイリスはベットでライカはソファで寝るという話にまとまりその日は終わったのだった。

そして朝を迎えたのだがイリスはかなり大きいベットに正直困惑気味だった。

なにせキングサイズのベットで大人でもゆうに3人は平気で入るサイズなのだ。

こんなサイズならライカと端っこずつ使って眠ればよかったのではと思ってしまう。多分提案してもライカは拒否するだろう。

正直イリス自身でさえもきつと緊張して眠れなかつただろう。

「ん。。。」

ソファで寝ていたライカが寝返りをうった。眠っているライカの顔がイリスから見えるそれは驚くほどに無防備だった。

完全に熟睡しているのだろう。恐らくイリスが少々動きまわってもライカは起きないだろう。

信頼されているのか？それともただの無警戒なのかとにかく未だ素性の知れないイリスに対してあり得ない対応だった。

「本当にライカさんって何者なんだろう？」

無防備に眠り続けるライカを見ながらイリスは小さな声でつぶやく。そのままベットから出ると昨日見かけたキッチンに向かっている。

ある程度の食材は揃っている様で、簡単なものならすぐにも作れそうだった。

イリスはそのままキッチンに立ち朝食を作り始めた。

「何のお礼にもならないけどこれくらいはしないかね。」

おいてある野菜や、干し肉などを使い丁寧に料理していく。いつの間にかライカの部屋には朝食のいい匂いが漂っていた。

自分でも驚くほど無防備だったと思う。わざわざ同じ部屋で寝たり、なにより一様警戒していたつもりがいつの間にか熟睡していた事。

実際の話、このイリスと言う少女は毒気が無さ過ぎる。心に一つも闇が無いかのような雰囲気を感じる。

その雰囲気は俺を熟睡させるまでにいたった理由ではないかと思う。

ライカはそんな事を思いながら未だまどろみの中だった。イリスが

何かしているのはわかるが特に問題は無いだろう。

そういえばさつきから物音がキッチンの方です。それに少し、いい匂いがライカの鼻をくすぐった。

(パンの焼ける匂い・・・?)

そんな事を思いながらライカはうつすらと目を開いた。思った通りイリスはベットにはいなかった。

ソファで寝たせいだろう少し体が痛い。ライカは体をゆっくり起すと周りを見回した。

物音の正体はすぐのにわかった。元々なんだかいい匂いが漂っていたのだから自然とその匂いの方向に向くのは当たり前だろう。

キッチンから何かを作る音がするライカは立ち上がるとキッチンに向かつて歩きだした。

それと同時にキッチンからイリスが出てくる。その手には焼けたばかりのパンが皿にのせられていた。

目の前にライカがいたことに驚いたのかイリスは一瞬目を見開いたがすぐ、ニコツと笑いかけてきた。

その顔につられる様にライカもわずかに笑う。

「おはようございますライカさん。えっと・・・朝食作ってみたのだけれど食べます?」

イリスの質問に思わず笑いそうになった。勝手にキッチンを使ったから少しビクビクしているのか？

それともまだ出会って間も無い為こんな風に相手の顔色を伺っているのだろうか？

そんな考えがライカの頭の中でぐるぐる回っていた。考え始めると暫し反応しなくなるのがライカの悪い癖でもある。

イリスの問いにいつまでも答えない為、聞いてきたイリスでさえ少し不安気味にライカの顔色を伺っている。

その視線によろやく気づいたライカは慌てて返事をした。

「おはようイリス。わざわざ朝食を作ってくれたのかい？せっかくだから頂こうかな？」

よろやくまともな反応が返ってきたイリスは微笑しながらテーブルにパンを持っていく。

「少し待ってて？今他のも持ってくるから。」

そういつてイリスはキッチンに戻った。残されたライカは特にすることも無くそのままテーブルに腰掛けた。

その後すぐにイリスが他の料理を持って現れた。テーブルに並べられる色とりどりの料理たちそれを見ているだけで食欲がわいてくる。

「へえ、すごいなこれは。」

ライカ自身はそんなに大したものとは出てこないと思っていた。しかしテーブルに出てきた料理はライカの予想を大きく上回っていた。

焼いたパンにウルスの実を使って作ったジャム、野菜サラダに卵スープ。デザートはヨーグルトにブルーベリーソースまでかけてある。

正直よく短時間で作れたと思う。それぐらいの出来栄だった。

「えっと、ライカさん？とにかく食べてみて口に合うかどうかかわからないけど・・・」

言われるままにライカはパンにジャムをつけ口に入れる。ウルスの実の甘みと微かな酸味が随分とパンに合う。

次に野菜サラダを食べる。シャキシャキした食感はもちろんだが今まで味わった事のないドレッシングを使っている。

「うん、おいしいよ。イリスこのドレッシングってもしかして君が作ったのかい？」

変わったドレッシングだったので思わず興味がでて聞いてしまった。味の違いに気づいてくれた事にイリスは満足げに笑いドレッシングについて話してくれた。

「うん。私が作ったの。それはスターネーブルの果実とナチュラルオイルにパウダーソルトとブラックペッパーが入っているの。」

「後、隠し味にエルフ直伝の調味料が少々かな？」

自慢げに語るイリスを見ながらライカは内心ほっとなっていた。よう

やく妙な気まずい雰囲気はなくなったこれで少しは話しやすくなるだろう。

二人はそのまま一緒に朝食を平らげた。デザートを食べ終わり少しお腹がこなれて来たころ片づけが終わったイリスがキッチンから出てきた。

「ライカさん、片づけ終わりました。今日はどうしますか出来ればギルドを見て回りたいのですけど？」

イリスの提案にライカは少し考える。まずはギルドメンバーの手続きを行い、ライセンスを発行しなければならぬ。

次にギルドマスターとの面会を経てようやくギルドの一員となるのだ。まずは手続きなのだがその前にイリスの姿を見る。

昨日は仕方なかったとはいえまともな服さえ用意していなかった。実際今イリスが着ている服は汚れこそ目立たないがあちこち破れている。

おそらく昨日の獣達の仕業だろう。

・・・コンコン

不意にライカの部屋の扉を叩く音が聞こえた。誰か来たのだろうかライカは扉の方に顔だけ向け「どうぞ」と答えた。

「しっつれいしまーーーーーーすっ！ライカさん帰って来たんだって？」

勢いよく開け放たれた扉から随分とハイテンションな女の子が入り込んできた。

赤い和風式の着物を着こんでいて着物のいたるところに綺麗な花の装飾が施されている。

年の割に胸は大きく、本来なら着物など似合わないのではないかと思っほどだ。

髪は長く後ろ髪を纏め上にあげ留めている。色は少し薄い茶色で瞳の色も同じように茶色だった。

その姿を見たライカは疲れたように溜息をついた。

「ノックを覚えたのは良いけどもう少し普通に入ってこれないかな。リーシャ？」

リーシャと呼ばれた女の子はいたずらっ子のような笑みを浮かべてライカに詰め寄る。

「え〜だって早く見たかったんだもん。ライカさんが連れ込んだ女の子〜（^ ^）」

「・・・はあ？ いったいこの馬鹿娘は何を言っているのだろう？ リーシャの発言にライカはついていけなかった。

しかし止まりかけた思考をフル回転させなんとか反応した。

「つまり、俺がイリスを連れ込んだという事になっているわけだね。リーシャ？」

「うんうん。ところでそのイリスさん？ってどこにいるの。」

質問の意味がわからなかった。なぜならイリスはリーシャの真横に状況が飲み込めないまま突っ立っているからだ。

「どこにもなにもすぐ隣にいるだろう？相変らずリーシャは猪突猛進と言っか周りを見ていないというか・・・。」

本当にこのリーシャと言う娘と話す疲れ。これで弓の名手というのだから人間分らないものだ。

ライカは深いため息をつきながら一人そう思うのだった。

ライカに言われようやく隣にいたイリスに気づいたリーシャはその異常なハイテンションの矛先をイリスに向けた。

「貴女がイリスさん？すごーいーいー！エルフ族なんて初めて見たよ。それにすごく綺麗だし」

そう言いつつリーシャは視線だけでライカを見ながらニヤニヤしている。視線に気づいているライカはあえて無視を決め込むことにした。

どうせリーシャの事だまたふざけた事しか言わないと思っていた。もちろんその期待は裏切られることはなかった。

「なるほどなるほど。これはライカさんでも連れ込みたくなる訳ですぬ〜にははっ！昨晚はお楽しみでしたか〜？」

お前は親父か！と心で叫びながらあくまでライカは笑みを浮かべ  
リーシャの邪推を聞き流す。もちろん笑みと言っても苦笑いだが。

正直

リーシャが部屋に入ってからライカは疲れっぱなしだった。一体い  
つになつたらこの嵐は過ぎていくのだらうと思いつながら。

以外にもリーシャと言う嵐を止めたのはイリスだった。

「えつとリーシャさん？初めまして私はイリス・フォルライトって  
言います。」

リーシャのハイテンションなどどこ吹く風のごとくイリスは柔らか  
い笑みを浮かべリーシャに自己紹介をした。

たったこれだけの事だがリーシャには効果抜群だったようだ。今ま  
で一人で暴走していたリーシャの動きが一瞬止まり慌ててイリスに  
頭を下げた。

「こ、こちらこそごめんなさい。まともに挨拶も出来なくて・・・に  
やははは。」

「おつとせつかくイリスさんが自己紹介してくれたのに私がしないと  
失礼だね。私はリーシャ。リーシャ・セルティカ。」

一部始終を見ていたライカは内心驚いていた。リーシャのハイテン  
ションを抑え込みまさかちゃんとした挨拶をリーシャにさせるとは  
思ってもいなかったのだ。

「ふふ。よろしくね。リーシャさん？」

イリスから握手を求める手が出される。リーシャもそれに答え握手をする。リーシャという嵐はようやく過ぎたって言ったようだ。

「あ、イリスさん？私の事はリーシャでいいよ。私の方が年下だし・・・。」

「うん。じゃあリーシャちゃんでもいいかな？」

やはり女の子同士だと仲良くなるのも早いようだ。二人はすっかり仲良くなり雑談を始めている。

ようやく落ち着いたところでライカは二人に話しかける。

「リーシャ、すまないけどイリスを風呂場に案内してあげられないかな？それと新しい服を選んで欲しいんだが頼めるかな。」

ライカの発言にリーシャは二つ返事で、うん。と答えた。本来ならライカ自身が動くのだがさすがに女の子の服選びなどは専門外だ。だから今日たまたまりーシャが部屋に来たのはある意味ラッキーだったのかも知れない。

「じゃあライカさん、行ってくるね。」

リーシャに案内されイリスは部屋を出て行った。一人になったライカはソファに腰掛けたまま目を閉じる。

「イリス・フォルライトか・・・。」

思わず頭に浮かんだ少女の名を呟く。彼女の正体はすでに分かっているギルドの情報網は広くその気になれば人一人の情報などすぐわかる。

ましてや有名な人物ならなおさらだ。

「今は黙っておくべきなんだろうな。何か理由があるみたいだし。」  
イリスが何者か分かっている為すでに警戒する必要はない。特に警戒することもなく眠っていたのはその情報があったからかもしれない。

またはイリスが持つあの雰囲気そうさせたのか。ライカは一旦考えを止め目を開くと立ち上がり自分の部屋を出て行った。

ㄥ二章 月桂樹と蒼翼ㄥ（後書き）

ふう。いかがでしたか？新キャラも登場しますます盛り上がりを見せるエターナルアークですが次回更新予定は今月中です。

編集を賭けるだけなので恐らくわかりにくいかと・・・  
ホントダメな作者ですいません。ではまたノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9008v/>

---

Eternal-ARK ~ 世界を紡ぐ想い ~

2011年10月13日01時52分発行